東京大学 THE UNIVERSITY OF TOKYO　東京大学 医学部 健康総合科学科

タンザニアの医療事情を知るためのスタディツアー Tanzania 2017/03/13~2017/03/23

北野綾香（看護学コース）・栂瀬ゆりえ（看護学コース）

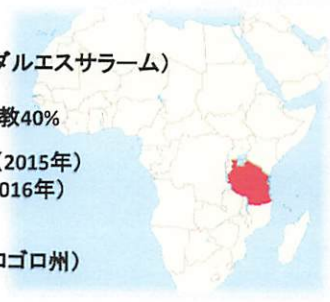
渡航先での活動内容

★タンザニア概略★

人口　：　5,182万人（2014年）
首都　：　ドドマ（経済面の中心はダルエスサラーム）
言語　：　スワヒリ語　（英語）
宗教　：　イスラム教40%　キリスト教40%

妊産婦死亡率　：　398人/10万人（2015年）
乳児死亡率　：　41.2人/1000人（2016年）

滞在先　：　ダルエスサラーム
キンゴルウィラ村（モロゴロ州）
ザンジバル島



★Kisenge先生（ムヒンビリ国立病院の小児科医）訪問★

タンザニアの医療事情について、私たちの興味を中心に概略を伺った。近年のタンザニアにおける医療の発達として、病院へのアクセスの改善、ワクチン接種の普及、医師数の増加が挙げられることや、Traditional healerが現在も農村部では重要な役割を果たしていることなど、タンザニアの実情について聞くことができた。

★多田さん、五十嵐さん（JICA青年海外協力隊）訪問
ムヒンビリ国立病院の病棟見学（産婦人科・小児科）★

病棟内では5S活動（整理・整頓等を通して、職場の環境を整えること）が実践されている様子や、病床数が足りないために一つのベッドを複数人で共用している様子などを見学できた。また、青年海外協力隊として、病院の環境改善やスタッフの教育を行った経験を伺った。

★キガンボニ（ダルエスサラーム近郊）の私立産婦人科の開設予定場所を視察・助産師であるAnethさん、Priscaさん訪問★

タンザニアでは未だ周産期の死亡率が高く、その一因として病院へのアクセスの悪さがある。
このような背景から、Anethさんらは国内では初の私立産婦人科を立ち上げようとしているが、資金の調達に手間取り、開設の準備が予定より遅れてしまっているとのことだった。
彼女たちの熱意を感じ、私たちにも何か手伝えることがないかと、今も連絡を取り合っている。

★WAMATA（エイズ患者の生活を支えるNGO団体）訪問★

代表のKadopeさん、4人のエイズ患者と対談させてもらった。HIV感染への対策は国家規模で行われていることや患者自身による地域へのエイズ予防・検査の啓発活動が行われていることなどを伺った。

★Kingolwira村クリニック訪問★

処置や妊婦健診の様子を見学させてもらった。特に周産期の管理は一冊のカルテで行えるようになっており、妊婦へ母子手帳も渡されていた。重症患者やハイリスク妊婦は町のセンターから救急車を派遣し、近くのモロゴロ中央病院に搬送される。
施設も整っており、地域の人々にとって一次医療機関として良く機能していた。

★ザンジバル島の助産院訪問★

3階建で妊婦健診から分娩、カンガルーケアまで行われている施設。助産師の不足から助産師免許を持たない清掃スタッフが介助を行う光景を目撃した。ばつの悪そうな顔をしながら語る師長さんの顔から人口爆発大国の闇が伺えた。

目的を達成できたか

今回の渡航の目的は、タンザニアにおける医療の現状と課題についてひろく学ぶことであり、この目的は達成できた。タンザニアでの医療事情をアフリカ全体に一般化することはもちろんできないが、それでもアフリカで共通して抱えている課題や介入の仕方の難しさなども感じることができた

将来の進路決定へどう影響したか

もとより国際保健分野への興味が強かったが、今回のタンザニアの滞在中に熱い思いで働いている人たちに出会い、彼らの力になりたいという思いが強くなった
。現在は、タンザニアでクリニック開設のために動く助産師と連絡を取り続けているが、資金集めの支援をしようと考えている中で、自分が今後どのように関わっていきたいのかを考えるようになった。

後輩へのアドバイス

今回は、タンザニアへの渡航ということで、危険なのではと心配され、渡航するか迷った部分もあったが、結果として、行ってよかったと思っている。この経験から、先入観を持たずに現場を見て、何を感じるのかということも大事であるように感じた。せっかく海外研修という機会なので、机上では学べないことをたくさん見て聞いて考える場にしてほしいと思う。
また、今回の私たちのタンザニア研修は先生方のご厚意で訪問先が調整できたのだが、このような繋がりを利用できるのも学生の特権だと思う。したがって、ぜひ、本学科の学生という身分を存分に利用した研修を組まれると良い経験になると思う。

グローバルな視点とは何か

私たちにとって、タンザニアは未知の国だったが、文化の全く異なる国においても、医療は人類共通の課題であるからこそ、異文化から来た私たちでも理解することができると実感した。その一方で、環境や立場が違えば、現在の医療に対する考え方も期待していることも異なるということも見えてきた。

目的以外に学んだ点、反省点

今回少し苦労した点として、語学がある。タンザニアの共通語はスワヒリ語で、村では先生や医師などの一部の人しか英語を話さなかった。スワヒリ語の勉強をする間がなく渡航してしまったため、現地に着いてから、簡単な挨拶や単語を覚えることとなった。事前に少しでも現地の言葉を勉強していくべきだったと反省している。
また、WAMATAを訪問した際に、患者から日本の状況について聞かれたが、日本で使われている薬品名など、答えられないことがあったので、もっと事前に調べていくべきだった。

研修支援制度に望むこと

このタンザニア研修は、先生方の人脈があったからこそ、実現できた。このように、自分たちの希望に合わせて自由に組むことができたことに感謝している。さらに、私たちの身の安全を第一に考えて調整していただいたおかげで、危険もなく、無事に学ぶことができた。今回の私たちの例も活かして、今後学生には渡航する地域の幅を広げていってほしい。